第７日

令和５年２月28日（火）

午後２時20分再開

○議長（半田雄三君）　休憩前に引き続き会議を開き、一般質問を続行いたします。

次に、８番内田恵三議員の質問を許可します。８番内田恵三議員。

（８番内田恵三君登壇）

○８番（内田恵三君）　本日４番目の一般質問を行います、８番内田恵三です。９月に引き続きやりたいと思うんですが、９月に私は、この市役所の入口にあります「人、自然、歴史が織りなす 水ひかる 朝倉」という本来の姿が、災害によってしばらくなおざりにされているという状況であるということを言いました。そういった中で、歴史を生かした、歴史・文化を生かしたまちづくりを提唱してきたつもりです。

今回３月議会にあたり、市長の施政方針演説の一番最後のほうに、「市民と創る朝倉」と２期目のスローガンはそう書いてありました。非常にいい言葉だなというふうに思っております。

今年は秋月藩成立400年を記念して、いろんな催しも考えられておりますし、いつものとおり、歴史を生かしたまちづくりという観点の中で一般質問を行っていきたいと思います。執行部におかれましては、明快なる答弁をよろしくお願いします。

（８番内田恵三君降壇）

○議長（半田雄三君）　８番内田恵三議員。

○８番（内田恵三君）　通告に従いまして、一般質問を続けていきたいと思います。

まず最初に、秋月博物館についてやっていきたいと思いますが、まず秋月博物館のことを多少説明いたしますと、秋月博物館は昭和39年に秋月黒田家御当主13代黒田長敬公が亡くなられたことにより、黒田家の所蔵品をどうにかしたいということで、秋月出身のいろんな人たちがお金を出し合って設立したのが、財団法人秋月郷土館がその始まりです。

当時は秋月出身の馬場義続検事総長、並びには東京帝室博物館館長、今の東京国立博物館の館長である土岐政夫さんとか、そうそうたる顔ぶれの人たちが、行政の力を一銭もかけずに財団法人として運営をしてきております。当時は非常にまだそういうのは珍しい資料館だったと思うんですが、それがまた昭和50年になりますと、土岐勝人さんが約１億円のお金を、巨費を投じまして、郷土美術館がつくられると。そこには世界の有名なルノワールとかシャガールとか、ピカソとかそうそうたる芸術家、日本で言いますと、東山魁夷とか横山大観、棟方志功とかいう、誰でも知っているような方々の名品を一同に寄附されて、それから昭和50年以降、ちょうど世の中が小京都ブームになりまして、秋月も非常に脚光を浴びて、昭和60年過ぎから平成の初めぐらいまでは、多いときには年間８万人近くの方が入場をするという、一大秋月観光の拠点になっていました。

さらに、歴史と自然が財産のこの秋月にとりまして、秋月郷土館の果たしてきた役割は

非常に大きなものがあります。それがいかんせん、九州国立博物館の開館とか時代の流れによりまして、平成の中頃ぐらいから、年間入館者が２万人を割るという中で、独立財産でやっていますから、なかなか経営は厳しいということで、残念ながらというか、朝倉市に移管されて今年で開館５年を迎えております。そういった博物館の在り方について、いろいろと質問していきたいと思います。

まず１番目に、開館以来の入館者の推移はどうなっているでしょうか。

○議長（半田雄三君）　教育部長。

○教育部長（時津美穂君）　議員お尋ねの朝倉市秋月博物館の入館者数の推移につきまして、お答えをいたします。開館いたしました平成29年度の入館者数は約１万4,000人、平成30年度は約１万6,000人となりましたが、令和元年度は約１万5,000人と減少いたしております。新型コロナウイルス感染症に伴います観光客の減少や、臨時休館の影響を受けました令和２年度は約9,200人、令和３年度は約9,300人と、入館者数が１万人を切っている状況でございます。今年度は感染症の大きな波がございましたが、１月末現在で１万人を超える状況となっております。以上でございます。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　まだまだ本来のあるべき姿には戻ってはないと思うんですが。開館以来、博物館は常に攻める博物館であってもらいたいと私は思っているんですけれども、それの一番大事なことは特別展です。そういうのをやって、やはり春とか秋にはやって、いろんなところから来ていただく。その特別展をすることによって、博物館の学芸員の質も向上し、博物館自体の価値も上がるということになると思うんですが、これまでの特別展などの取組について答えてください。

○議長（半田雄三君）　教育部長。

○教育部長（時津美穂君）　議員お尋ねの、これまでの特別展の取組などにつきましてお答えをいたします。博物館の中心的な展示活動につきましては、開館を記念いたしました特別展を毎年度１回、計５回開催をしております。この特別展は秋月藩の歴史や郷土の偉人をテーマに企画をし、秋月藩医の緒方春朔展や秋月藩のお抱え絵師斎藤秋圃展、また戦国時代に活躍しました秋月種実展など、最新の研究を基にした展示内容で、これまでに県内外の博物館や美術館、大学、個人など延べ67か所の所蔵先に借用交渉を行い、実施をしております。

またこの特別展の開催を経ることによりまして、朝倉市秋月博物館への信頼や信用が増したことで、展示終了後に毎回資料の寄贈や寄託の希望が来るなど、年々収蔵資料が充実をしてきております。さらに博物館の所蔵します資料を様々な切り口で紹介いたします企画展を、年に３回から４回実施しており、朝倉地域の歴史の掘り起こしによる新たな発見、魅力の発信につなげる内容となっております。

次に、令和３年に整備完了いたしました交流広場での事業につきましては、物産市や秋

月、高鍋、米沢の三藩によります秋月三名君フォーラムなどが行われる予定でございましたが、コロナ禍により中止となるなど、大規模な活動を行えておりません。ただし、市の指定無形文化財の林流抱え大筒や光月流太鼓の披露、秋月鎧揃え行列イベントなどを開催し、今年度は情報交流棟内にデジタルサイネージによります観光案内を取り入れるなど、秋月を訪れます観光客との交流の場として活用しております。以上でございます。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　それでは次に行きたいと思います。博物館というのは基本的には資料の収集、保存、展示はもちろんのことですけれども、調査研究をずっと継続的にやっていかなければならないと思います。それで秋月の歴史をより深く研究し、その研究成果を公開し、活用することを大いに期待をしております。資料の調査研究についての考えについて、お伺いをします。

○議長（半田雄三君）　教育部長。

○教育部長（時津美穂君）　議員お尋ねの資料の調査研究につきまして、お答えをいたします。朝倉市秋月博物館には、秋月黒田家文書約１万5,000点が収蔵されております。これまで甘木市史資料編や秋月郷土館資料集などで出版されておりますが、大部分の古文書はまだ未解読のまま残されているものも多くあります。これは、現在紹介されております秋月藩の歴史が実は未完結ということであり、今後新たな大発見がある可能性を秘めております。

一方で、市民グループであります秋月古文書講読会は、長年にわたりこの秋月藩関係古文書の解読に尽力をされております。教育委員会といたしましても、この解読された内容を広く公開し、秋月藩の調査研究に役立てていきたいとの考えから、今年度解読された一部を秋月博物館資料叢書として出版する予定にしております。

今後は貴重な古文書を受け継いだ教育委員会としまして、大学や研究機関、市民グループなどとも連携しました調査研究を行い、歴史資料として有効活用することで、秋月の歴史の解明につなげていきたいと考えております。以上でございます。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　次の質問に行きたいと思います。そもそも博物館活動というのは、やり方によっては本当にすばらしいものになると私は思っております。それで一番理想的なのは、市民に愛される博物館づくり。結局、底辺、裾野の広いいろんな人たちから活用され、勉強する機会にすると。さらにそこから、どこの町でもそうです、村でもそうですけれども、まちおこし、村おこしの原点というのは、自分たちの先人たちが残した歴史、財産をさらに見直して、生かすことでみんなまちづくりをやっているんです。よそから持ってくるんじゃなくて。

そういった意味で、今後の秋月博物館の在り方によっては、この朝倉市全体の大きなまちづくり活性化の大元を成しえるのではないかと、私は思っております。今５年たってお

りますので、今後どのような方針の下で、どのような博物館を目指していくのか、これは教育長に御答弁をお願いします。

○議長（半田雄三君）　教育長。

○教育長（早野展生君）　今議員が申されましたように、その地域の歴史を知って、それをさらに深めて広げていく、これが基本ではないかというふうに言われましたけれども、私も同じような考えでございます。この秋月博物館は、平成29年の開館以来、黒田家や秋月郷土館が大切に守り伝えてきた貴重な文化財資料の収蔵保管、展示公開を行いながら、博物館としての基本的な運営や資料の取扱い方法など、学芸業務等の知識経験を積んでまいりました。この５年間は、立ち上げの基礎固めを行う観点から、今申しました資料収集とか研究活動に重きを置いて活動してきました。

今後は、秋月博物館を、ただいまから申します三つの拠点として展開していきたいと考えておるところでございます。一つは、秋月の歴史的重要度をアピールする拠点ということでございます。二つ目は、地域の歴史や文化の継承と活動の拠点としたいということ。三つ目は、生涯学習・学校教育の拠点であるということでございます。以上申しました三つの役割を果たしていくために、市民とのコミュニケーションや情報発信を強化したいと考えております。

市民交流広場の音楽イベントや物産イベント、旧戸波家住居を活用したお茶やお花、甲冑の着付け体験など、日本の文化や秋月の歴史・風土を身近に感じることができるような企画を実施して、入館者の増加につなげていきたいと考えています。また秋月藩成立400年記念事業として、秋月藩の宝として伝えられましたかぶとの修復やレプリカの作成、秋月藩成立についてのシンポジウム等々を展開して、秋月を多くの観光客が来ていただく拠点としていきたいと考えております。

さらには、博物館資料のデジタル・アーカイブ化や多言語化を推進し、小・中・高等学校における授業での利活用など、社会の変化や学校教育における学習内容の多様化、さらには郷土愛の育成に対応できる博物館を目指していきたいと考えております。また、観光客には秋月、朝倉をより深く楽しんでいただけるような博物館運営を展開していきたいと考えているところでございます。以上でございます。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　今、教育長の回答のように、積極的に博物館運営をやっていただき、全国に誇れるような博物館運営をしていっていただきたいと、切に要望をいたします。

次に、秋月藩成立400年についてですけれども、昨年が福岡藩の藩祖黒田長政公が亡くなって400回忌がそれぞれのところで行われたわけですけれども、今年は秋月藩成立400年を迎えます。そのときに長政公が亡くなって、長男の忠之に47万石ですかね、とりあえず秋月が三男の長興に５万石、その弟の高政に東蓮寺、今の直方ですけれども、そこに４万石が分地され、52万石から９を引くと、43万石ですかね、福岡本藩は。

その中で弟の高政が継いだ東蓮寺藩は廃藩になったり、また設立したりで、トータルで100年ぐらいしかなかったんですけれども、秋月藩は立藩当初から将軍にお目見えをして、独立藩としてやってきたわけです。何かとかく秋月５万石が小さな藩、小さな藩とよく言われますけれども、本当は、江戸時代、恐らく300ぐらいの藩があるんですけれども、大小合わせて、加賀100万石を筆頭に。上から数えると、88番目なんです。だから決して小藩ではないと。上中下で言うと、上の下か中の上ぐらいの石高になります。

なぜ秋月藩が小藩と思われがちかというと、福岡県の周りの藩がみんな大藩なんです。本家はそうだし、久留米藩が21万石、柳川が12万石ですかね、それと小倉も15万石というふうに、周りがあまりにも石高が大きいもんだから、５万石が小さく見えるんです。でも全国的に見れば、決してそんな小さな藩ではありません、秋月藩は。

連綿と秋月藩成立以来、黒田家がずっと続いてきております。それがおよそ240年間の間に、やはり藩というのは、今の市町村と比べれば、いろいろ外交権とか貨幣とか司法とか権限は、一つの国並みぐらいのものを持っていますので、そういった中で独自の文化が醸成されてきたと思うんです。それが今でも息づいておると。

そういった中で歴史に恵まれた秋月藩ができてきたと思うんですけれども、この記念すべき成立400年について、記念事業について今回いろんなことが考えられ、企画されておられるようですので、これについて説明をしていただきたいというふうに思っております。まずは商工観光課のほうから、よかったらお願いします。

○議長（半田雄三君）　農林商工部長。

○農林商工部長（上村一成君）　それでは商工観光課所管分について、まずはお答えしたいと思います。令和５年度は、復興計画における再生期から発展期につなぐ重要な時期であります。この時期に秋月藩が成立して400年を迎えるのは大きなチャンスであり、この歴史的な転機を生かすことで、朝倉市の振興、発展に結びつけたいと考え、記念事業を計画したところでございます。

事業期間としましては、令和５年度から令和６年度の２か年間を予定しております。個別の事業といたしましては、商工観光課所管分として新規開店支援、それから秋博と宿泊施設コラボ、また城下町秋月謎解きゲーム等を実施する予定でございます。一つ目に申し上げました新規開店支援につきましては、秋月でのにぎわいを創出するため、空き店舗などに新規出店する事業者を支援する事業でございます。

次に秋博と宿泊施設コラボにつきましては、秋月博物館見学と市内宿泊を結びつけた事業で、宿泊割引や市内買物に使えるクーポン券を発行する事業でございます。最後に城下町秋月謎解きゲームにつきましては、秋月での滞在時間を延ばすため、若者に人気の謎解きゲームを実施する事業でございます。このほかにも、秋月観光協会が実施する水をテーマとした水自慢事業への補助も盛り込んでいるところでございます。

続いて、一部着手している事業について、御回答したいと思います。まず秋月藩成立

400年ＰＲ事業でございますが、これは令和５年度から６年度までの２か年にわたる事業期間中に、記念事業を盛り上げるアイテムとして使用するロゴマークやキャラクターについて、２月に募集を開始したところでございます。市報や市のホームページのほか、インターネットの募集サイトにも掲載しており、結果発表は４月を予定しているところでございます。決定したロゴマークやキャラクターにつきましては、市の事業で使用するだけでなく、市内の各団体にも使用を呼びかけ、全市を挙げた機運づくりにつなげたいと考えているところでございます。

次に、３月に募集を開始する事業といたしましては、記念イベント等企画運営業務委託事業があります。これは民間の方々への周知を兼ねたもので、記念事業を官民一体となって盛り上げていくため、秋月藩成立400年のテーマに沿った記念イベントなどの企画を公募するものであります。行政では思いつかないような面白いアイデアが提案されることを期待しているところでございます。以上です。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　あんまりいっぱいあるんで、詳しいことは後々またあるでしょうから、一応分かりました。今度は教育委員会のほう、お願いします。

○議長（半田雄三君）　教育部長。

○教育部長（時津美穂君）　議員お尋ねの400年記念事業の文化・生涯学習課分につきましてお答えをいたします。朝倉市秋月博物館が所蔵いたします銀箔押蛤脇立突盔形兜、こちらの修復及びレプリカ作成を計画しております。今タブレットに写真を御用意しております。このかぶとは、関ヶ原の合戦におきまして黒田長政の命を救ったことから、秋月黒田家の家宝として大切に守り伝えられてきたものでございます。

次に、朝倉市秋月博物館が所蔵いたします島原陣図屏風に、秋月から島原へ出陣する様子が描かれておりますが、この中に初代藩主長興の前を進むこのかぶとが見えます。400年という歳月の中で銀箔や漆の剥落などの損傷が著しくなったことから、今回、九州国立博物館の助言を受けながら保存修復を行いたいと考えております。併せて展示用のレプリカやイベント用の模造品も作成することで、他の博物館への貸出しやイベントでの活用により、秋月藩や朝倉市秋月博物館の象徴的な宝としてＰＲしていきたいと考えています。

その他の記念事業としまして、秋月藩初代藩主の黒田長興に関します特別展やシンポジウム、秋月の史跡案内などを企画しております。市民にあまり知られていない長興の人物像や、成立間もない頃の秋月藩の動向などを紹介しながら、秋月の歴史を伝えたいと考えております。また、秋月藩と同様に成立しました、直方市にございました東蓮寺藩との交流展示なども行う予定でございます。

さらに10年ごとに出版しております市内の小学校用副読本「わたしたちの朝倉」は、令和５年度から改訂する予定でございます。秋月藩成立400年の内容を加えまして、朝倉市の特色を生かした授業や、身近な地域の学習に活用していく考えでございます。秋月藩成

立400年の記念事業は、市内外の多くの方に秋月の歴史をＰＲする絶好の機会でございます。秋月が持ちます歴史的背景や継承されております伝統文化等を周知することで、ふるさとの魅力が再発見され、誇りや愛着が醸成されるよう取組を進めていきたいと考えております。

また、秋月あるいは朝倉市の知名度が上がり、多くの観光客が訪れるよう、商工観光課とも連携協力しながら、この秋月藩成立400年記念事業を積極的に展開していきたいと考えております。以上でございます。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　突盔のかぶと、これは今説明がありましたように、関ヶ原の戦いのときに黒田長政が、大垣城のすぐ近くに合渡川という川があるんですが、そこで溺れかかったときに、そのかぶとを被っていたので黒田長政と分かったと。それで助け出されたという、もう黒田家にとっては非常に由緒あるかぶと、これを、やっぱり長年、今説明がありましたように、銀箔が剥げたりとか、眉間のところが割れたりとか、ずいぶん傷んでおりましたけれども、今回しっかり修復とレプリカとできるということは、非常にいいことだと思います。これを大いに活用して、400年事業の目玉として取り上げていっていただければ、突盔のかぶとも全国的に有名になるんじゃないかと思いますので、頑張ってください。

では続けて次に行きます。今度はもう最後になりますが、米沢市との姉妹締結について、お伺いをしたいと思っております。これは、私は４年前に一応聞いたことがあります。そのときは、当時の総務部長が、機運が盛り上がったらやりましょうというふうな答弁を頂いたんですが、そのときに市長の答弁はもらっていなかったんです。

それであれから４年たって、ちょっといわれを多少説明させていただくならば、今、高鍋と米沢と秋月で三名君フォーラムというのを６年ぐらい前からやっております。じゅんぐりに高鍋から始まりまして秋月、米沢でもう二回りしたんですかね。４年前したときにはちょうど米沢に初めて行ったときでしたけれども。何で米沢市の締結を私が提言をするかというと、あまりにも関係が深くて、そしてすばらしく江戸時代の名君と言われるやっぱり上杉鷹山の存在。この方が父方は秋月家だし、母方は秋月黒田家であるということです。

この関係をちょっと分かりやすく言うならば、米沢の上杉家から嫁いで来られた豊姫、瑞耀院豊姫と言ったらいいと思うんですが、これは大河ドラマで天璋院篤姫という表現がされた人に倣って、分かりやすく言うと瑞耀院豊姫という方が秋月黒田４代目の黒田長貞に嫁いできます。ここからがこの三つの家の上杉・秋月・黒田の関係の始まりですね。この豊姫という方は、もっと分かりやすく言うならば、忠臣蔵であまりにも有名すぎるあの吉良上野介の孫娘になります。どういうことかというと、吉良上野介の息子さんが米沢の４代藩主に養子に行かれたと。その娘が豊姫です。

この豊姫が秋月黒田家に嫁入りされて、そこで生まれたのが春姫という方がおられるんですけれども、この方はやっぱり、その家が同じ秋月である高鍋秋月家と秋月黒田家は非常に関係がありますので、黒田家から高鍋の秋月家へ嫁に行かれると。そこで生まれたのが秋月三名君の秋月種茂と上杉鷹山の兄弟です。そしてこの秋月黒田から嫁に行かれた春姫は２人の子どもを産んだ後若くして亡くなる。

その後に秋月に嫁に入ってきたこの瑞耀院豊姫が江戸藩邸、いわゆる当時は、高鍋藩は今の麻布高校のあるところに藩邸があって、また秋月藩は芝新堀といって、ほとんど近い、１キロもないようなところにあるんですけれども、近いところにあって、母親を早く亡くした種茂公と鷹山公はこのおばあさんによって育てられたという話もあります。

そういった中で、この瑞耀院豊姫は、上杉家といったらもう日本を代表する武家の中の名家です。藩祖は、中世からありますけれども、春日山城におった上杉謙信、いわゆる川中島の合戦で武田信玄と戦っていた上杉家ですけれども、その上杉家が領地替えによって会津120万石というふうになるんですけれども、これは関ヶ原のときに、家康と反対勢力だったもんですから、120万石から米沢に30万石に領地替えをさせられる。

さらに跡継ぎがなくて半分の15万石にさせられるというふうに、この瑞耀院豊姫にとってみれば、自分の実家、いわゆる米沢の上杉家に跡継ぎがいないというのは、当時は、跡継ぎがいないと改易になりますので、非常に大事な問題だったわけです。その中で自分の孫が、ものすごく２人とも優秀であるということで、長男は高鍋の後を取りますけれども、鷹山公を自分の実家である上杉家のお世継ぎにということに、これは豊姫の働きによってそういうふうになったと。それがこの秋月三名君の始まりということが言えると思います。

それぞれ、鷹山があまりにも有名過ぎますけれども、高鍋に行くと、みんな口をそろえて最初に言われるのは、「上杉鷹山は、ただお兄さんのほうが優秀であって、お兄さんがやったことをみんなまねたのですよ」というふうに、高鍋の人たちはみんな誇らしげに言われます。その種茂の子どもで養子に来たのが秋月黒田家ですね、黒田長舒です。この３人を検証しようということで今やっております。これはもう本当に江戸時代300年、300年弱だからどれぐらいですかね、全部で3,000人から5,000人ぐらいの殿様がおった中でも、いろんな人たちから言われるのも、非常に名君たる名君であると言われております。

それが今の時代にやっていくときには、特に上杉鷹山は倹約を旨として米沢藩を建て直し、さらに天明の飢饉とか、以後起こる飢饉で１人の餓死者も出さなかったと言われるほどの名君で、今でももう米沢に行ったら、鷹山と呼び捨てしたら叱られます。鷹山公と呼んでくださいと、それほど慕われております。それを、お互いやはり秋月家が生んだ三名君ということで、お互い刺激し合いながら勉強会をしようということで、去年の10月22日に第６回目の秋月三名君フォーラムが開催されました。

主催をしたのは、６年前から米沢に民間団体で米沢・朝倉交流会というのが設立されております。これは前市長の安倍三十郎さんなんかが中心になってやってありますけれども、

それと米沢は、今はＮＨＫの大河ドラマ、上杉鷹山を大河ドラマにしようという運動を始めております。この大河ドラマも一つとして二つの会が中心となって、秋月三名君フォーラムをひとつの起爆剤としてやろうという動きが今出ております。

そういった中で、秋月からというか朝倉市から去年は28名の人が参加をして、盛大に、米沢城跡にあります伝国の杜というすばらしい博物館と会議場があるんですけれども、そこで300人、会場満員の中で、それぞれの時代に合ったテーマを持って、去年はちょうど今言いましたように米沢藩の財政問題について、２年前は秋月で、このときはコロナでオンラインでやったんですけれども、コロナの中で当時の緒方春朔とか、そういう病気に関したことを３地区がそれぞれ出し合いながら、今の時代に生かすような形で講演会、シンポジウムをやっております。

そういうふうな盛り上げがいろいろあるんですけれども、最近非常にうれしいことに、林市長はＮＨＫ大河ドラマを、ＮＨＫに申し込む協議会で米沢市長とか高鍋町長と一緒にＮＨＫに陳情に行っていただいたということで、私は非常にうれしく思っております。今後、３地区がさらに情報交換しながらまちづくりをしていく上で、非常に僕は大きな力になると思うんで、今後、高鍋とはもう姉妹都市になってもう長いですけれども、この関係を生かして米沢市との姉妹締結に向けて、すぐはできないにしても、積極的に対応していただけるように思いますが、市長の考えをお聞きしたいと思います。

○議長（半田雄三君）　総務部長。

○総務部長（平田龍次君）　市長に答弁いただく前に、これまでの経過や基本的な考え方を私のほうから述べさせていただきたいと思います。米沢市との交流については、過去平成28年までは米沢市より米沢雪灯篭まつりや、米沢上杉まつりに御案内をいただき、可能な場合は出席をしておりましたが、その後はございません。また議員御承知のとおり、秋月三名君フォーラムは、民間レベルで平成29年３月に最初に高鍋町で開催され、以降毎年持ち回りで開催されているところでございます。

交流は姉妹都市関係に限らず、現在も行われている歴史のつながりによる交流、または共通に持っている資源、遺跡などを生かした交流を行うことにより、連携したり、お互いを刺激しあったりして、共に成長していくものと考えられます。そのような経過を踏まえて、姉妹都市に関する基本的な考え方としては、双方の首長、議会をはじめ、双方の市民も含めて、双方の認知度が広がり、機運の盛り上がりの中から、姉妹都市の締結が望ましいと考えているところでございます。

○議長（半田雄三君）　市長。

○市長（林　裕二君）　ちょうど１か月前になります。１月31日にＮＨＫに米沢市長、高鍋町長、米沢市長には大河ドラマを進める組織が令和３年度にできたということで、そちらの会長さん、副会長さんが同行されております。高鍋町にあっては、高鍋町と高鍋商工会議所の会頭が一緒にお見えでありました。私はそれほど知識もございませんでしたので、

本市の教育委員会の文化・生涯学習課長に同行してもらって、ＮＨＫを訪ねたところであります。

それぞれの町長、今申し上げました同行された人たちから、いろんな大河ドラマ化について意見がありましたので、私もにわか勉強ではございましたが、緒方春朔の絵本がつくられておりましたので、その絵本を持参いたしまして、ＮＨＫ、それから米沢市、高鍋町、それぞれにお渡しをする中で、議員が言われました秋月という名前が冠につくんです、三名君サミットは。そのことも、今議員が説明されたことを、上杉家と米沢と高鍋と朝倉、上杉、それから高鍋の秋月、そしてこちらの黒田長舒公ですかね、そのあたりの非常に強い結縁関係といいますか、そういったものもにわか勉強でありましたが、勉強をいたしまして、米沢、高鍋ほどのものではない、朝倉は今からだということも含めて、ＮＨＫの対応された理事とか部長さん方に、私なりに話をさせていただきました。

この件につきましては、米沢市からではなくて、高鍋町長から、昨年の秋ぐらいから東京でお会いしたときとか電話とかで話があっておりまして、去年の暮れにまたお話をいただきましたので、はい、分かりましたと、同行させていただきましょうということで、行ってまいったところでございます。これがいきさつになります。

さて、ただいま総務部長が回答いたしましたとおり、姉妹都市の締結につきましては、やっぱり交流が盛んとなり親交が深められ、首長、議会をはじめ、双方の市民も含めて双方の認知が広がり、気運の盛り上がりがあってのことであるというふうに現在考えているところであります。

これまで継続し、行われてきた秋月三名君フォーラム、令和５年度から各種取組が始まる秋月藩成立400年記念事業、また上杉鷹山公の大河ドラマ化、こういったことについても今後継続した要望等の取組、あるいは交流が予想されます。新型コロナウイルス感染症の影響で交流等が十分に行えない期間も続いてきましたが、米沢市は本市の姉妹都市である高鍋町と姉妹都市を締結されていることからもいろいろな交流に対し、どのような関わり方、協力支援等ができるか、また大河ドラマ化要望等を機会に、行政としても積極的に動いていきたいと考えております。

米沢市におかれては、市長さんが安倍市長さんから代わられておられます。先ほど答弁がありましたが、平成28年ぐらいまでは米沢に来てくださいという御招待があっておったということで、それに応えて塚本市長さん、それから森田市長さん、あるいは副市長さん、あるいは議会の皆さん方も米沢に行かれたということでございます。米沢市のほうから御案内があれば、積極的に考えてみる必要があるというふうに考えている次第でございますので、よろしくお願いします。

○議長（半田雄三君）　８番内田議員。

○８番（内田恵三君）　こういった問題は民間が主導するのが一番いいと思うんです、本当は。市民同士が盛り上がって。そういった中で私が知る限り、かつては秋月藩に林流抱

え大筒というのがありますけれども、米沢にも同じ古式銃の団体で、稲富流鉄砲隊というのがあります。交流で何回か行き来をやっているわけです。そういうのもありますし、今一番盛んにやっているのは秋月三名君フォーラムですけれども、そういった中でどんどん積極的に対話をしていただきたいと思います。以上をもちまして、私の質問は終わります。

○議長（半田雄三君）　８番内田恵三議員の質問は終わりました。

暫時休憩いたします。

午後３時８分休憩